

烏蛇の恨み      = = =      三州横山話より

蛇が鎌首を上げて怒ったときは、ちょっと撲っても、すぐ頸が飛ぶと言います。飛んだ頸はかならずさがして殺しておくものと言います。

烏蛇は、蛇の中でも最も執念深く、また強いものだそうで、これに馬の脊を投げつけると、すぐ鎌首を上げて追うと言ひ、とりわけ芦毛馬の脊には、怒って果てしなく追うそうです。あるとき、山吉田村の満光寺の小坊主が、門前に遊んでいて、烏蛇を見つけ、馬の脊を放りつけたところが、どこまでも追って来て、ついに逃げ場がなく、本堂の須弥壇の上に駆け上がったので、蛇がすべて登ることが出来ないでいると、その物音を聞きつけた方丈が、この有様を見て、掃木を持って来て、その蛇を払うと、蛇の頸が飛んでゆくえが知れなくなったと言います。その夜から小坊主が発熱してしきりに渴きを訴えるので、寺女が水甕の水を汲んで来ては飲まして介抱していると、明け方になってついに息が絶えたと言います。朝になって、その女が水甕の傍に行くと、甕の中で何か音がするので覗いて見ると、中に前日の蛇の頭が泳いでいたということです。

同じ村の豊田某という農夫が、秋、山間の田で仕事をしていて、烏蛇を見かけ、馬の脊を放りつけると怒るという話を思い出して、投げつけてみると、果して鎌首を上げて追って来たので、すばやく稲叢の陰に隠れて待っていて、追って来た蛇を鎌で打つと、やはり頸が飛んでそのゆくえが知れなくなったので、その日は仕事を中止して家へ帰って、ふたたびそこへは行かなかった。ところが、翌年の春、そんなことは忘れてしまって、雨の降る日に、その田へ行って春田（春、田を耕すことを春田と言う）をしていると、「どこからともなく幽かなうなり声がするとともに、小石ほどのものが、咽喉のところへ飛んで来て、ぶつかったので、蓑を脱いで検めると、一つの蛇の頭が、蓑の紐に喰いついていたと言いました。大方、秋の頃殺した烏蛇の頸が、恨みを晴らしに来たのが、蓑を着ていたため、咽喉に喰いつくことが出来なかったのだろうということでした。私の母が子供のおり、本人から聞いたと言いました。